

『バドミントンとの歩み』

講師 銭谷 欽治 (公益財団法人日本バドミントン協会専務理事)

経歴

石川県加賀市出身

県立大聖寺高校－中央大学－河崎ラケット－三洋電機

インターハイ シングルス準優勝 (1970)

インカレ シングルス優勝 (1973,74)

ダブルス準優勝 (1974)

団体優勝 (1973,74)

全日本総合大会 シングルス 7回優勝 (1974,76,77,78,79,81,84)

ダブルス 1回優勝 (1981)

トマス杯大会などの日本代表選手

三洋電機のコーチ、監督として日本リーグ、全日本実業団大会で多数、優勝に導く



皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました、銭谷欽治でございます。まずもって、第54回全日本教職員バドミントン選手権大会が、この奈良で開催され、明日から試合が始まるということで、お喜び申し上げます。そして、この研修会にお呼びいただきまして、本当にありがとうございます。

今、高橋さん(本連盟理事長)がおっしゃったように、私が専務を拝命したタイミングでこの話をいただいたということではありません。もう1年前から、この研修会にはぜひ時間を空けておいてくれよということでしたので、それを、まずもってお話しさせていただきます。

今日は、皆さんお忙しい中、貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございます。演題は、「バドミントンとの歩み」ということで、私の自己紹介から始めて、現在に至るまでの人生を、第1、第2、第3章としまして、例えば、第1章が学生時代まで、第2章が就職をして、定年を迎えるまで。僕は、今年で62歳です。早生まれですので、来年の3月で63歳になるのですけれども、第3章を迎える立場で、ご紹介にあずかりましたように、6月7日付で専務理事という立場を拝命して、身の引き締まる思いをしております。

私は、プロフィールにもありますように、石川県の加賀市というところに生まれました。有名なのは、加賀温泉とか、粟津・片山津温泉とか、あとは、人と言えば、森喜朗元総理大臣だとか、プロ野球の松井選手とかです。

そこの錦城中学校というところでは、野球をやっておりました。大聖寺高等学校という普通科高校へ入ったときは陸上をやったのです。陸上をやって1カ月ぐらい練習に参加したのですけれども、正直申し上げて、走っているばかりであんまり面白くないんです。たまたま担任の先生が、陸上部の顧問の中川先生という方だったんですけれども、相談に行ったら、とにかく研究室に來いということで。行ったところ、私との運命の出会いと言える、僕の人生を決定付けた村西一先

生とお会いしました。「一」と書いて「ひとし」と言うのです。石川県バドミントン協会の副会長をされているのですけれども、その先生との初めての出会いで、今でも鮮明に覚えているのですが、「おまえ、バドミントンを知っているか」と聞かれて、正直に「知りません」と。「わかった。じゃあ、明日から来い」と。何のことかわからない。知らないのに来いなんて言われて、その日のうちに、スポーツ店からラケットを買ってこいと。

今でも覚えているのですけれども、その当時、1,400円のウツのラケット。ガットが、ブルーとか白のまだらのガット、皆さん、覚えていらっしゃいますか。ぼよんぼよんの張り上げの。この1,400円のラケットを、親にせびって買ってもらって、それが5月の中旬ぐらいの話なんです。そこからスタートしました。

もちろん、握り方も知りません。バドミントンのバの字も知りませんし。僕は、高校でバドミントンを始めたときに、インターハイという言葉が知らなかったんです。高校1年のときに、団体戦で運良くインターハイに出ました。その当時は、前年度の優勝校が招待校で出られたんです。金沢市立工業高校が前年度の優勝校で、石川県2位の大聖寺高校が出られました。そのとき、マネジャー役で連れて行ったもらったのが、広島福山の福山インターハイです。昭和43年です。僕は、インターハイって全然聞いたこともないし、何のことだろうなと思って、正直なところ、こういう全国大会があるというのを、本当に知りませんでした。2年生のときは、ダブルスだけ出られて、3年のときは、個人戦のシングルスで出場できまして、名古屋のインターハイ、愛知県体育館ですね。あそこで決勝まで運良くいけまして、そのときに、いろんな大学からもお声を掛けていただいて、結果的に中央大学に行くことになりました。高校時代は、本当にバドミントンの素人ですので、練習時間も大体授業が終わってからですから、4時から6時ぐらいの2時間程度で終わっていました。もっと打ちたいんですよね。でも夜は、体育館は閉められるので、朝、仲間と集って、体育館の窓を開けて、授業前によく1時間ぐらい練習をしていました。それを見つかって、よく用務員さんに叱られた記憶があります。

インターハイで準優勝をして、中央大学から熱心にお誘いいただきまして、中央大学に入学をして合宿所に入りました。フーテンの寅さんで有名な帝釈天のある柴又に、中央大学の合宿所があったんです。それは、本当にぼろ屋なんです。地元の商店街の人たちは、お化け屋敷と、呼んでいました。部員は全員が寮に入っていて、大体キャプテンは、客間が与えられていました。その他は2階の8畳一間で、1年生は4人いました。掃除と、布団を敷くのも上げるのも、1年生の仕事です。寝るのは、いつも真ん中なんです。それで、先輩が夜遅くまで起きていても、練習がしんどいので、早く寝られる。やかましくても明るくても寝られるというのは、大学1年のときに訓練されて、身に付いたという経験があります。その柴又帝釈天の近くに、江戸川というのがあるんです。そこをよく走りました。橋から橋を往復で一回りすると10キロぐらいあるのですけれども、そこは、夏も冬もよく走りました。いきなり春の合宿に呼ばれて、ウサギ跳びをやっておけと言われて、ところがキャプテンが忘れて。僕は、一生懸命ウサギ跳びをしながら、キャプテンにアピールしているのですけれども、無視されて。2時間、ウサギ跳び。合宿後には、膝ががたがたになっちゃって、これは、言うことを聞いていたらつぶれるなと思って、それから、ちょっと抜くことを覚えました。

大学時代、団体戦は、春・夏のリーグ戦とか、インカレは数々優勝させていただいたんですけれども、個人的には、大学3年、4年のインカレで2連覇させていただきました。学生時代の一番の貴重な出会いは、僕的には、ここでの秋山真男さんと小島一平さんです。皆さんご存じだと思いますが秋山さんは、59歳で残念ながらお亡くなりになったのですけれども、彼は、唯一、全

英選手権の男子シングルスで2位ですから。その秋山さんと小島さんの薫陶を受けて。よく呼ばれました。神奈川にも呼ばれましたし、山梨のぶどう畑でランニングをしたり、一緒に練習をさせていただきました。夜は、必ずついてこいということで、飲み連れていていただいたり、その間にいろんなことを教わったような気がします。

当時は、大学が御茶ノ水にありまして、体育館はありませんでした。その当時、部費が、年間12万円しかないのです。シャトルはどうしたのかというと、夏休みと冬休み明けにキャプテンから、「はい、2万ずつ徴収」とか言われて。そのころ12人ぐらいいましたので、2万でしたら、24万です。それで、シャトル代の借金をメーカーさんからして、安く入手させていただいて、それを何とか回していたというような時代でした。

自分のところに体育館がないので、ジプシーですよ。江戸川区の体育館とか、文京区だとか、板橋区とか、いろんな体育館へ行きました。マネジャーが抽選を取りに行きます。お金もかかります。中央大学の部の練習というのは平均すると、週に3日しかなかったです。体育館が取れないときは2日、インカレ前とかなんかで頑張っ取れても最高で4日。全体練習と言っていました。それも3時間で出なきゃいけないですから、体育館を出なきゃいけない直前までがんがんバドミントンのゲームをやっていて、その後、荷物をすぐ、「運べ」と言って、だーっと更衣室へ。そこで、外でまた1時間ぐらい、しつこくトレーニングをするんです。それが、1年生のときには苦で。体育館の練習はもう12時に終わっているのだけれども、トレーニングが終わると1時過ぎとかでした。大学時代に非常に身に付いたのは、自分たちで何とかする、ということですね。個人練習という言い方をしていたんですけれども、自分で仲間を呼んで練習に行こうかと言って。授業の合間に文京区の体育館とかに行きました。公立の体育館には公開日ってあるじゃないですか、100円とか、200円とか払って。それを、早く行ってコートを取って、2人とか、3人とかで練習しました。あと、日本大学とか、明治大学の先輩とか、そういうところをお願いしに行って、他流試合というか、そういうことをしょっちゅうしていました。だから、体育館は、どこやっても全然苦じゃなかったです。少々見えないとか、照明が悪いとか、床がどうのこうのとか、滑るとか、全然平気です、その間に身に付いてしまいましたね。

あと一つは、お金がない。やっぱりシャトルがなかったんです。ニューのシャトルが買えないんです。そこで、ぼろのシャトルの糸を切って、いい羽を抜くんです。そして別の台に植えて、白い接着剤、ボンドですか、あれでくっつけて、自分の練習用のシャトルを最低1ダース、できれば2ダース確保するんですよ。それを寝床に置いて。次の日までに乾くでしょう。そういうことをよくやっていました。もちろん監督、コーチもおりませんし。コーチなんていうのは、先輩の小島さんとかですよ。そう時代でしたので、とにかく自主運営というか、自分で何もかも用意しなきゃいけない。

学生12名で寮生活を送っていたので、食事も、正直、今考えたら、ろくなものを食べていなかったですね。1年生のとき、僕らのときは5人いたので、5日に1回食事当番が回ってくるんですね。米は炊きますよね。みそ汁も、みそはあんまり買えないので、むちゃくちゃ薄いみそ汁で、ほとんど具がなしというやつですよ。おかずなんていうのは、大体お金がないので、1品ぐらいで。まず1杯目は、丼に漬物で腹一杯食うんですよ。2杯目は、おかずをちまちまとゆっくりと、そういうのをやっていました。柴又の商店街の魚屋さんとか八百屋さんのおばちゃんやおっちゃん連中に、中大の学生って有名でしたので。1年生は、みんな坊主頭で、買い物かごをぶら下げて、1,000円ぐらいを持って、買い出しに行くんですよ。そうすると、「お兄ちゃん、これ、明日で賞味期限が切れるんだけど、これ、持っていきなよ」と言って、魚の腐る寸前のやつ、干物をもらっ

たりとか。焼いちゃえば、全然食べられるんですよ。そういうのも何度か経験させていただきました。本当に柴又は、随分お世話いただいた、本当に懐かしいところです。

学生時代のことで、もう一つ皆さんにご披露したいと思うのは、みんながライバルだったということです。週に3日ぐらいしか練習がないので、今考えると、全然仲良しクラブじゃなかったです。練習時間があまりないので、3時間の練習で、ゲームの練習しかやらないんですよ。12人の総当たりの表を作っているんです。それに、克明にポイントを、キャプテンが付けているんです。それで、春のリーグ戦は3複6単でしたから、1位誰それ、おまえはレギュラー。2位何誰それと、5位、6位といくわけです。7位が補欠。練習試合のときでも、頑張っって勝てばレギュラーになれるんだという。これは、僕自身、すごくいいなと思いましたね。僕もキャプテンをやりましたけれども、けがとかをしている選手の特別な事情を除いて、基本的には、そのやり方で4年間やりました。練習を終わって、飯食って、9時から9時半までに部屋へ戻りますよね。ぶっ込みだから、みんなの行動がわかるわけですよ。しんどいからもう寝ようかなと思っていると、誰かがここそと、ヤッケを着て、隠れたようにトレーニングに出ていくんだから。昔、僕らは、ヤッケと言っていましたね、トレーニングウェアなんて言っていませんでした。そとと誰かが出ていくのを見ると、あ、あいつ、出ていった、嫌やなと思いつつ、あいつ、絶対1時間ぐらいトレーニングするだろうなと思うので、これはあかんわ、行かなあかんなと思って、一人ずつ、ゆっくり10分ぐらいずつ、交互に出ていくんです。夜のランニングとか、江戸川の土手を走っているんですよ。変なアベックに会ったりしたこともありましたが、中大のバドミントン部の同期であれ、先輩であれ、後輩であれ、そこですれ違っても、一切話ししないんですよ。だから、そこは、みんな結構いい意味でのライバル心を持っていたので、5メートル幅くらいの道路のところでフットワークをやったり、スクワットをやったり。その当時のトレーニングなんていうのは、ウエイトとか、そんな知識もないので、腕立て、腹筋、背筋、スクワット。そういうことばかりやっていました。だから、大学時代のそういった環境が幸いして、ある意味での自立、自分で作っていかなくちゃいけないんだなということを教えられたような気がします。

それで、大学の4年生のとき、昭和49年なんですけれども、僕は、学生でオールジャパン、全日本総合で初優勝をしました。それは、小島一平さん以来だったらしいんです。そういったこともあって、河崎ラケットというラケットメーカーにお世話になることになりまして、社会人としてのスタートをしました。その当時の河崎ラケットのバドミントン部には、今井茂満さん（前専務理事）とか、平井克英さん（本連盟常任理事）とか、いろんな先輩がたくさんいらっしゃったのですけれども、まとまって練習をやるというのは、ほとんどないんです。実業団大会とかの前ぐらいしかやらないんですよ。その当時、トッププレーヤーが就職するといったら、ヨネックスさんか、河崎ラケットか、トヨタ自動車ぐらいしかないのかな。そんな中で、ラケットメーカーにお世話になったら、まず、シャトルがただ、用具もただ、使いたい放題。ラケット、ウェア、シューズ。それが最大の魅力でしたな。

じゃあ、練習はというと、練習相手もみんな営業とかに出回ったりしてばらばらなので、練習相手と練習場所の確保には大学をよく使いました。中大の後輩のところ、前もって電話を入れておいて、「おれ、行くからな」と。後輩は随分緊張したと思うんですよ。そこへ行って練習をしました、もちろんシャトルは持って行ってあげます。例えば、大学の部の練習というのは、その当時は週に3回ぐらいしかなかったですから、それとは別に文京区の体育館に、いろんなところから一人二人ちょっと優秀なやつを呼んで、そこで練習をやりました。練習をしてくれたということもあって、文京区の体育館の帰りに、大概、御徒町とかへ食事というか、飲みに行きましたね。

あの当方で、ビール1本180円というのをよく覚えています。大体500円あったら、ビール1本とつまみで飲めた時代ですので、そういうことをやっていた。そこでいろいろと学生に話をし、秋山さんや小島さんと同じようなことをやっているわけです。河崎ラケットには9年間お世話になりました。仕事としては、バドミントンの広報ということで、9年間に、47都道府県の主な都市部へは全部行きました。大会も含めて、講習会だとか、強化練習会とか、あと、学校回りですよ。そうやって回ったことによって、いろんな人との出会い、そういうのが、今現在の財産になっております。

その間に、トマスカップとか、世界へも、いろんな国を日本代表で回らせていただきました。われわれの時代は、今の時代と違って、ナショナルチームのトップでも海外遠征は、多くて年に5回か6回しかなかったです。大体、春にデンマークオープンと全英オープン。その後、インドネシアオープンとか、その辺がちょこちょこって入って。だから、合宿もそれに合わせて、多くて3~4回。それも、その当時は、今のナショナルトレーニングセンターとか無いですから。赤羽のナショナルトレーニングセンターなんて、隔世の感ですよ。僕らのころは、遠井元専務が監督のころで、泊まるどころと云ったら、栃木の旅館でした。旅館で、飯は中華料理です。もうラーメン、ギョーザの世界ですから、ご飯とラーメン、ギョーザ、レバニラ炒め、その程度ですよ。泊まるのは、旅館にぶっ込みで、クーラーをがらがらかけて寝ているというような。当然、トレーナーもいませんし、コーチもいません。遠井監督と、秋山さん、小島さん、池田信孝さんとか、梅野尾昌一さんとかが上にいらっしゃって、十数人ぐらいで合宿をやったという時代でした。

僕がちょうど31歳のときに、縁があって、大阪の三洋電機のほうから、コーチで来ないかというお話をいただきまして、それは、僕の家内も大阪出身だったものですから、これも縁かなと思って、お話を受けさせていただいて、昭和59年の5月に三洋電機に途中入社させていただきました。その年のオールジャパンで、北田スミ子さん（芝スミ子）と、シングルスのアベック優勝をさせていただきました。実は、河崎ラケット時代に、湯木博恵さんともアベック優勝をしていますので、アベック優勝は2回させていただいています。この優勝が31歳の時。大学4年のオールジャパンで初優勝しましたので、高校時代の5月にバドミントンをスタートして、ど素人から始めて、足掛け7年でチャンピオンになって、7回目の優勝が31歳。32歳直前なんですね。これが僕の中のギネスブック、最年長記録を持っていたのですが、去年、佐々木翔君に抜かれました。33歳ですよ。佐々木君もすごいなと思います。

さっき人生の第2章と言いましたが、今度は、三洋電機で指導者としてスタートをさせていただいて、まず初めに、僕はどういったことをしようかと思ったら、小島一平さんが、「おまえに女のコーチができるわけねえだろう。相手してりゃいいんだよ、おまえは」って酔っ払って言われて、そのことが妙に引っ掛かっている。そうかと、じゃあ、おれは、もう動ける間、ずっと相手をしようと思って、北田とかのゲーム練習の相手をしていました。それをまず基本にしました。相手をしながら結構アドバイスをしたりするじゃないですか。でも、あまりぐじゃぐじゃ言わないで相手をして、実践で示して、それが一つです。

もう一つは、女性は、例えば10人選手がいたら、10人それぞれに1日1回声を掛けないと、やっぱりおかしくなるですよ。例えば実業団とか、日本リーグとか、全日本総合の前になると、レギュラー中心の練習を組まざるを得ないですよ。そうすると、何かチームに違和感があって、おかしくなってくるんですよ。だから、僕が意識したのは、毎朝練習へ行ったときに、必ず10人に分け隔てなく、同じようなレベルで声掛けをしていました。「おはよう」とか、「おまえ、今日どうだ」とか、「体調どうなの?」とか。それは、ものすごく強く意識しました。それと、僕は、コー

チで入って、監督になってからも、練習ノートというのをそのころから管理するようになって、必ず朝の体重だとか、睡眠時間だとか、調子とか、そういうのは、練習の前にチェックするようにしました。それで、ウォーミングアップのときも、結構、見ていないふりをしながら、ランニングの仕方とかをよく見ていました。そうすると、大体わかるんですよ。体調がよくて気持ちも乗っている子は、背中とか、走り方とか、アップの仕方から、やっぱり雰囲気が違うんですよ。何かおかしな子は、ちょっとどよんとした走り方をしています。例えば足が痛いとか、家族関係とか、友人関係とか、彼氏と何かあったのかなとか、そういうのを感じながらやっていましたね。だから、練習メニューも当然考えていくんだけど、行ってから、みんなの表情を見てからちょっと変えたり、フレキシブルに練習メニューを組んだりしていました。

三洋電機には、僕の前任者の宇治収さんが監督でいらっしゃって、もともと月原朗さんが監督をやっていたのですが、宇治さんが、住金和歌山から入られて、僕は、2代目のコーチで入りました。私が入ったときは、まだ練習が、仕事が終わって3時か4時始まりだったんです。これでは絶対無理だな、勝てないなということで、上司を説得しまくって、それを2時に上げて、その次に、昼に上げて、要するに午前勤務にしてもらいました。それで、飯を食わせて、昼の2時ぐらいから練習。そこから手を付けました。要するに、環境整備です。三洋電機の体育館に行きましたら、ウエイトの器具は、バーベルが1個か2個しかなかったんですよ。ウエイトルームと言っても名前だけで、鉄アレイぐらいしか置いていないんです。宇治さんと相談して、「これはあかんよな」と言って、お金も掛かることですので、予算を、何とかその当時の部長にお願いをしました。その当時は弱小で、予算も限られているので、まず中古品を買うことにしたんです。どっかのスポーツジムのつぶれたところを探しまくって、それをできるだけ安く買いたたいて。ベンチプレスを入れようとか、2年目はスクワットを入れようとか、3年目は何とかを入れようとか、大体5年計画ぐらいで、フルに揃えていった経緯があります。

企業スポーツを心得ていない会社は、企業チームの捉え方が弱いんですね。最初、海外遠征に行きますとか、海外合宿をやりたいと言うと、その当時の部長クラスの方々は、「海外って、それ、何や？」という時代だったんですよ。「スポーツで海外合宿、そんな、おまえ、ぜいたくな。何考えとんねん。」というようなことを言われました。僕は、バドミントンのある程度トップを経験して、チームを強化しようということを受けて入ったので、ああ、このギャップはすごいなと思いました。だから、環境整備とともに、上司の意識改革にちょっと時間をかけないと、会社の理解を得られない。そのために、まずは成績を上げなきゃいけないなという、ことを感じました。だけど、私がコーチとなった初年度にいきなり私自身が北田とアベック優勝したり、2年、3年目に、実業団で優勝して、日本リーグで優勝して、会社の理解もどんどん深まっていきました。

環境整備では、先ほど言った練習時間と、それから年々時間をかけて、トレーナーとか、食事、寮生活とかの整備に手を付けていきました。オグシオがいた時代ですけれども、食事は、栄養管理士を年間600万のコストを払って常駐してもらって、昼・夜、作ってもらいました。昼を食べさせて、昼寝をさせて、夜も食べさせて、その栄養管理士にパソコンを持たせて。オグシオの時代は、選手がほとんど10人ともナショナルチームでしたので、海外遠征も多いんですよ。それでみんなにパソコンを持たせて、「今日、何食べたの？」とか、メールのやりとりで。写メを撮ってデータで送らせて、栄養管理士が、「あ、これ、駄目だよ」とか、「試合前は、こういうのを取ったほうがいいよ」とか。2年、3年やると、これは食べていいとか、これは太っちゃうよとか、これは、寝る前はやめたほうがいいということを考えるようになります。そういうのは、やっただけ、選手のクオリティーが上がっていくんですよ。だから、選手のレベルが本当に

上がりました。今、ジュニアなんかで問題になっていると思うんですけども、おなかがすいたら、すぐに駄菓子を買ってきたり、チョコレートを食べたり、菓子パンを食べたり、主食を食べずにカップラーメンとか、あるじゃないですか。ああいうのも、やっぱり教育をしなきゃ駄目なんですよね。子どもに任せっきりでなくて、先生方とか保護者の方も一緒に交えて、そこから教育して子どもたちに教えるということの必要性を、三洋電機時代のそういう環境整備の経験から、非常に強く感じます。それと、トレーナーも専任で1人、もちろんコストも掛けましたけれども、専従で必ず1人は雇わせていただいて。その方は海外遠征にも帯同したり、北京オリンピックのときにも、一緒についていってもらいました。

それと、もう一つは、メンタルトレーニングをやりました。僕は、メンタルの重要さというのはそのころから認識していたので、昔の東京教育大を出られて、岐阜大学の教授をやっていたしゃるスポーツ心理学では、第一人者の鈴木壯先生にお願いをしました。取っ掛かりは、井田貴子選手を取るときに、東海女子短期大学（現東海学院大学短期大学部）の天野博江先生から、それが条件だということで。こっちも必要性を感じていたので、鈴木先生に、岐阜から、最低月1回来ていただいて、全体で10人ぐらいいる選手のメンタルトレーニングを、約1時間やってもらうんです。それが終わってから、一人一人を、順番はランダムに決めて、個別にカウンセリングをやるんです。そうすると、言い方は変なんですけれども、健全な子は10分ぐらいで終わるんですよ。病んでるとは言わないけれども、ちょっと悩んでいる子はやっぱり1時間ぐらいかかっちゃうんですよ。それを、鈴木先生が結構時間をかけてやってくださって。それが終わって、夜、われわれスタッフと食事に行って、一応アドバイスをいただくんですよ。でも、絶対に個人情報と言わないんです。そうでなかったら、カウンセリングが成り立たないんですよ。こっちも聞かなかったです。ただ、アドバイスだけくれるんです。この子は、もうちょっと励ましたほうがいいんじゃないですかとか、この子は、もうちょっと練習を抑えたほうがいいんじゃないですかとか、そういう、本当に遠回しなアドバイス。そうやらないと、選手たちと鈴木先生との信頼関係がなくなって、本音を言わなくなりますので、カウンセリングの意味がなくなっちゃうんです。それを、約16から17年間、三洋電機がつぶれるまでずっとやっていて、僕は、それはすごく効果があったなと思います。ほとんどの選手が高校卒業、18歳で入ってきましたので、その子たちがチャンピオンになっていく中で、人間形成の上で、ものすごく成長したなというのを、周りの人が言ってくれるというのが大きかったなと思いました。

もう一つ、僕自身も含めて、選手というのは、上を目指しているやつは、ライバルに、やっぱり絶対負けたくないじゃないですか。例えば、海外遠征に日本代表で行って、自分が準決までで、ライバルが決勝までいったら、悔しいですよ。それを、よくジャパンとしてとか、インターハイとか国体のときにもチームとして応援しろと言って。もちろん応援はしますよ。だけど、選手の腹の中は、正直、負けろ、負けろという意識が働くんですよ。ちゃんと腹から応援しろと言っても、もう悔しくて悔しくて、それは絶対無理ですよ。でも、それを我慢させて、礼儀として、応援させるということは教えなきゃいけないと思うんです。だから、その辺のことは、特に、やっぱりトップを目指している選手には、そういうこともわかった上で接したほうがいいかなと思いました。

あと、これは受け売りなんですけど、四条畷学園高校の片岡輝明先生をご存じですよ。インターハイの団体戦で10回優勝されているんですよ。当時、一世を風靡（ふうび）して、北田も含めて、数々のチャンピオンをつくっている先生に、よく指導者としての薫陶を受けたましたよく飲み連れて行ってきて、「おまえな、選手が例えば10人いたら、5種類あるんや。5種類、

何かわかるか」と言うから、「いや、わかりません」と言ったら、「1番目は、天才や」と言うんです。天才はおるんやと。「2番目は、これは努力するやつや。3番目は、中庸・凡庸で、平凡なやつだ。4番目は、ちょっとできの悪いやつだ。5番目は、ランクを付けたら、必ず最下位のやつがおるやろう。それを、うまくやろうと思ってら、どうやったらいいかわかるか」と。片岡先生がよくおっしゃっていたのが、「天才型は、ほっといたらいいんや。あいつらは、自分で気付いてやっていくから、2番目をこっぴどくやっつけるんや」という言い方をされていたんですね。だから、努力型の選手を、大阪弁で、めっこを入れて指導して、あの当時ですから、ちょっとスパルタ的な指導もありましたけれども、そうすることによって、中庸・凡庸が上に引き上げられて、4番目の選手たちも、上がっていくと。もう一つ肝心なのは、「選手が10人いたら、必ず最下位の10番目の選手がおるやろう。これは、やっぱり忸怩たる思いもあるし、これをほっとくと、腐るんや、腐っていくんや。これを腐らせてしまうと、チーム破壊者で、デストロイヤーになるんや。だから、そこを腐らせないように、上手に、一番下の選手をうまく指導をしながらやっていかないと、チームというのは、いいかたちで成り立たないよ」ということをよく教えていただきました。だから、それを考えますと、何でも組織は一緒なのかなと思います。

一つ例を上げますと、女子のダブルスパートナーって、皆さんは、どういう認識がありますか。僕の経験上は、仲のいいパートナーはあまりいません。仲のいいパートナーはいないというより、ほとんどが、仲は悪いです。最初は、成績が上がってくると、仲はいいんです。いつもくっついてるんだけど、どんどん落ちて、大体のペアは、最後は、あんまり仲がいいことはないですね。自我が出てくるといふか、女性の場合はいろいろあるんでしょうね。だから、そこが男性と女性と違って、ものすごく難しいといふか。僕らは、よく男性の指導者とも話をするんだけど、「男性の指導をしているよりも、女性のほうが、3倍くらい労力がかからない？」と言ったら、「少なくとも2倍はかかるよね」とか。やっぱりいろんなかたちのフォローで、しょうもないことでも声を掛けて、「おい、今日は、何か、髪型変わったんじゃないの？」とか、そんなことも踏まえて、感情的に気持ちよく、バドミントンが前向きにできるような環境づくりもやっていくと、女性アスリートにとってはすごくいいのかな、というようなことは、経験上感じました。

ちょっと会社の話になっちゃうんですけど、僕は、スポーツ部門と社会貢献の部門を任せられて、7～8年、ラグビーも担当したんですね。ラグビーは、今はトップリーグで14チームやっていますし、パナソニックは非常に強くて、3連覇とか、優勝の常勝チームになっていますけれども、僕が担当したときは、8チームで、トップリーグの始まる入れ替え戦に出たくらいのチームだったんですね。そこで、チーム部長になられた古瀬洋一郎さんと、古瀬さんは三井住友銀行から来られて副社長になられた方なんですけど、環境づくりをいろいろやっていました。ラグビーのチームは、三洋電機の例でいくと、スタッフ、選手を全部入れて、60名です。60名を雇わなければいけないんです。選手は、15のポジションに3名ずつ。そうすると、45名ですよ。トレーナーは3人、大体トップリーグに入っているチームでは、3人抱えています。3人で15人ずつ受け持ちます。あんながたいのごついやつを15人触るので、大変でしたよ。その45人のうちの、大体17～18人から20人は外人ですので、選手も結構英語をしゃべれるんですけども、通訳も、必ず1人は要るんです。そして、ドクター、それと食事。

そういったこともあって、僕は、フロントとしては、強くするためにその当時の井植会長にご相談させていただきました。ニュージーランドのオールブラックスって強いじゃないですか。クライストチャーチにカンタベリーラグビー協会というのがあって、その協会はものすごく力を持っているんです。その協会と三洋電機が業務提携を結ぼうということで、その当時で、

4年でトータル1億ぐらいの契約を結んで。オールブラックスの選手を3千万とか4千万で雇っていたんですが、みんな、故障を隠してくるんです。3年契約とかで、来て1年目はいいところを見せようと思って頑張るんです。ところが2年目、3年目は、ほとんど膝がぼろぼろとかで出られないんです。そこでこんなのはもうやめようということで、オールブラックスに入るような若手を、先に青田買いしようということになり、事前にリサーチして、いい選手を600万とか700万の安いコストで、毎年2～3人採り始めたんです。それとオールブラックスのコーチを、パートタイムで三洋電機ワイルドナイツに来てもらって、コーチの交流ということと合宿の交流ということというところを行いました。合宿も、網走にスポーツフィールドラグビー場というのがあって、ラグビー場を十何面持っているんです。トップリーグは誘致されて、われわれも、そこへ行ってたんですけども、60人が動くと、1回の合宿で、大体500万掛かるんです。それがニュージーランドでやるのと、コストが大して変わらない。だったら、ニュージーランドでやろうということになりました。コーチもいるし、練習相手もそこで、強いやつとコンタクトできるので。今、世界のトップチームのスーパー14というリーグ戦がありますね。南アフリカやオーストラリア、ニュージーランドの。その中にパナソニックから田中というスクラムハーフだとか、山田とか、3～4人、パートタイムの契約で行っていますよね。そういうのがあって、日本のトップリーグ自体も、ちょっとレベルが上がってきたかなということもありましたね。

ラグビーも、オグシオも、両方強くなってきたのが、2007年、2008年なんです。2008年は、北京オリンピックでした。そのころに会社が、ちょっと下降気味になってきたんですよ。そのときに、電通にお願いをして、2007、2008、2009年の3年間、ラグビーとバドミントンのメディアの露出を全部調べてもらいました。広告媒体のCM換算値という計算方法があるんです。どこの媒体でオグシオが載っていたか、例えば、ニュースで何秒、TBS、NHKが何秒で幾らって、計算式があるらしいんです。新聞に、何行何段、スポーツ紙、雑誌、地方紙、どうのこうのまで全部調べます。その結果、2007年度が、バドミントンは、約142億円の換算価値だったんです。ラグビーは85億。トータルで、227億だったんですけども、2008年度の北京オリンピックのときの、いわゆるオグシオ最強期ですけども、そのときに、何と露出が極端に増えて、バドミントンで293億、ラグビーが88億で、381億円の広告価値でした。2009年まで調べて、オグシオが解散した途端に、残念ながら82億円で、露出が極端に落ちたんです。ラグビーは、逆に、トップリーグで日本選手権3連覇とかしたので、117億円。それでも、トータルで299億円。なぜこういうことをやったかという、経営会議における理論武装なんです。その当時、僕は、社会貢献とラグビー、バドミントンで、100名弱ぐらいの社員で、年間、13億ぐらいの予算を使っていたので、それからいくと、さっき言った381億円なんて、もうそれだけで、30年分ぐらい稼いでいるわけですよ。企業スポーツの存続を語る上で欠かせなかったんです。だから、会社が苦しくなったときに地域貢献をしようと、バドミントンは子どもたちのスクールを92年から展開しました。最盛期で13拠点、これは、四條畷、大東市、東大阪市で、各小学校とか市立体育館の13拠点で、子どもたちの数は300名を超えるぐらいの地域貢献をやっていました。やっぱり世の中が経済的にもどんどん厳しくなっていく中で、地域に根差した活動もやっていかないとお互いが発展していかないのかな、という感覚をもっています。今、日本リーグに所属している16チームのうちで、そういうことを実践されているチームもあります。ジュニアの指導に一生懸命力を入れたり、全国レベルで講習会とか、そういった活動をされている企業が、だんだん多くなっています。これは、絶対、今後の企業スポーツを語る上では必須かなという思いでおります。

最後のほうに、好きな言葉をご紹介させていただきたいのですが、中国の思想家で呂新

吾という方がいらっしゃいます。その方が書いている呻吟語(しんぎんご)という言葉で、リーダーの第一の資質は何かというような優先順位の書き物なのですが、一番は、深沈厚重(しんちんこうじゅう)と言って、物事を深く考えて、沈着冷静で人間としての重みを持つてということをおの方は言われているんです。2番目は、磊落豪雄(らいらくごうゆう)で、気持ちを大きく持って、細かい細事にこだわらないこと。3番目は、聡明才弁(そうめいさいべん)と言いまして、これは、頭が良くて、才能があり弁舌が立つこと、という順番で、僕も、自分でぴんときて、その言葉を自分の手帳にも書き留めて、何かあったらこれを読み直したりしながら、成長していきたいなと思っています。

そして、もう一つ、これも同じようなことなんですけれども、よくこういったお話をさせていただく機会のときに紹介しているのは、VSOPという言葉です。指導者の資質というか、何でも、リーダーたるにはどうしたらいいかという観点から言うと、「V」は、バイタリティー、要するに活力というか、エネルギーです。「S」は、スペシャリティーです。いわゆるスペシャリストという言い方に置き換えたほうがわかりやすいかもわかりません。3番目の「O」は、オリジナリティーです。だから、その人しかできない、まねのできないものを達成するという。

スポーツ界でも、どの世界でも、経営でも、政治家でもそうだと思うんですが、VSOまで達成する人は結構いらっしゃると思うんです。けれども、最後の「P」で失敗する人がほとんどだと思います。「P」というのは、まさしく英語の通り、パーソナリティーなんです。これは、人格とか、人間性とか、これが、なかなか僕なんか、この最後の「P」に本当に気を付けないといけないと思いつつ、これで失敗する人は、本当に多いと思います。

あるデータで、アメリカのハーバード大学の卒業生を25年間追っ掛け調査したアンケートがあるんです。各界、いろんなスポーツ界、経済界とか、政治界とかで、成功したOB・OGの方へのアンケートで、その人たちにアンケートをした中の、自分が成功するのに、何が一番必要だったかという問いに対するアンケートの答えです。第1位が、同じようなことを言っているという結果が出たそうです。要するに、人間関係とコミュニケーション関係をうまく取ることに苦労した。それが取れないと成功しないと、そのアンケートでも、皆さんが言っているそうです。逆に言ったら、学力とか、財力とか、人種とか、その人のコネクションのパワーだとか、そんなことは二の次三の次で、やっぱり人間関係とコミュニケーションを上手に取っていけることが一番成功の秘訣じゃないかなと挙げている方が第1位で、多かったそうです。

最後にまたバドミントンの話に戻りますけれども、今、日本代表の日本チャンピオンも、男子は、佐々木くんとか、頑張っていますけれども女性の高橋、松友なんか、世界ランキング1位を、3カ月キープしているんですよ。ところが3カ月もキープして、メディアの露出がほとんどないでしょう。おかしくないですか。それは、広報も含めて、やっぱり僕らの責任なんですよ。だから、その辺のことを、もっとPRしていかなくちゃいけない。桃田くんなんて、SSP、スーパーシリーズプレミアムで初優勝ですよ。今、世界ランキング4位ですよ。早川、遠藤は5位です。女子のシングルで、奥原が10位、山口茜が11位かな。これだけ、10位前後に挙がっている競技は、調べてください、多分ないです。テニスは、錦織が1人、孤軍奮闘頑張っていますけれども。バドミントンは、そういうデータで見ると、すごいんですよ。団体も3位です。

もう一つ、僕の記憶では、今、日本バドミントン協会、会員登録は26万人なんです。これは、上から5番目だそうです。一番多いのは、やっぱりサッカーだそうです。サッカーは、百何十万人いたんですよ。ソフトテニス65万人ぐらいいるんですよ。残念ながら、バドミントンは負けているんです。でも、バドミントンは、50~60あるNF(国内競技連盟)の中で、トップ5

ぐらいに入っているんです。もう一つの指標で、これは、本当にその数を実数かどうかわからないんですけども、いわゆる町で、羽根突きで遊んでいる方がいらっしゃるじゃないですか。その統計をどこかが発表していて、それも、バドミントンは5番目ぐらいです。数字はちょっとろ覚えですが、900万人ぐらいいたかな。競技者レベルではないんですけども、それを入れると、すごくいるんですよ。だから、本当に競技者レベルで言われているのは、登録していない人たちを入れると、多分500万人ぐらいいらっしゃるんじゃないかと言われているんです。それを、26万人の登録の人をまず倍の50万人にして、それを100万人にしたら、登録費も、予算も潤沢に入ってきて、いろんなかたちで使えていきますし、もっともっとメディアに向けてやっていくんじゃないかなとは思っています。

選手は本当に頑張っているんですけども、われわれとしては、もっと選手の評価をしてあげられるようなシステムをつくっていかなくてはいけない。今、どこのNFも困っているのは、JOCもものすごく困っているのは、セカンドキャリアで、元世界チャンピオンが、就職難で困っているのが実態なんですよ。プロ野球なんかでもそうですよね。一部の方が、解説者とか、監督・コーチのスタッフで残っていますけれども、プロ野球選手の全員がそれで残れるはずがありません。各アマチュアのNFの世界チャンピオン、日本チャンピオンなんて、皆さんそうなんです。今、バドミントンのチャンピオンになって世界を目指したら、その間は、仕事はできませんよね。その彼らが引退した後に、じゃあ、セカンドキャリアという、今は、本当に厳しいんです。だから、JOCも本腰を入れて、セカンドキャリアの対策をやろうということで、いろんな紹介業務とかもやっているんですけども、なかなかやっぱり、うまくいかないですよ。

皆さんにご紹介した言葉通り、選手自身も、やっぱり最後の「P」が大事。日本チャンピオンになった人で、VSOの人はいっぱいいるんですよ。でも、最後は人格とか、人との接し方とか、プレゼンテーションの仕方とか。負けたときによくメディアから取材されるでしょ。オリンピックなんかは、皆さんよくご存じのミックスゾーンってありますよね。あれも、義務があるんですよ。あれは、JOCやIOCから言われているんです。それを嫌だと言ったら、その競技では、もうアウトなんですよ。だから、負けてもちゃんとしている人は、カメラ目線で、悔しいですとか、相手が強かったですとか答えるように各NFは指導しているんです。だから、やっぱり選手自身のセカンドキャリアとか、将来をつくっていく上で、その人格形成の教育というのはすごく大事なと僕らも本当に感じています。バドミントンのスキルとか、技術とか、ただ優勝とか、実績ばかりじゃなくて、われわれ協会もそうですけど全国の所属チームとか、保護者の皆さんとか、それに携わっている県の協会の方とかもその辺のことも同時に踏まえて、人格形成の教育を、時間をかけてやっていくことがすごく大切かなと、最近、特に思うようになりました。

今日は、約1時間ちょっとお話しさせていただきましたけれども、東京オリンピックに向けて、あと5年です。

その前にプレ大会も開かれますが、今は残念ながらBWFに日本からの理事がいないんです。日本で東京オリンピックがあるのに、日本協会からBWFの理事が1人も出ないなんて、僕は恥ずかしいと思っています。

高橋さんがBACの副会長ですので、何とか高橋さんにBWFの理事になってもらって、意見を反映していきたいと思っています。今、プレ大会、世界選手権も高橋さんと一緒に鋭意努力して、動いていこうかなという最中ですので、皆さんも、今後ともバドミントン界にご支援いただければと思います。

長い時間、ご清聴ありがとうございました。

平成27年度全日本総合バドミントン選手権大会レポート

第54回全日本教職員バドミントン選手権大会で全日本総合大会出場の資格を得た選手の成績をレポートします。

【 】は教員大会のランキング。

平成27年11月30日～12月6日：国立代々木第2体育館

男子シングルス

選手名			総合大会の成績	対戦相手	
銭谷 翔	(和歌山県)	【1位】	1回戦敗退 0-2(20-22, 19-21)	坂井 一将	(東京都)
千京 尚将	(福井県)	【2位】	1回戦敗退 0-2(9-21, 9-21)	西本 拳太	(東京都)
村上 俊	(和歌山県)	【3位】	予選敗退 0-2(14-21, 16-21)	松川 直弘	(神奈川県)
吉村 諒	(長崎県)	【3位】	予選敗退 0-2(15-21, 11-21)	渡邊 達哉	(富山県)

男子ダブルス

選手名			総合大会の成績	対戦相手	
吉村 諒 長嶋 一輝	(長崎県)	【1位】	1回戦敗退 0-2(15-21, 15-21)	大越 泉 星野 翔平	(東京都)
黒田 匠馬 大橋 擁太郎	(岐阜県)	【2位】	1回戦敗退 0-2(20-22, 14-21)	竹内 義憲 島田 大輝	(東京都)
谷口 宏紀 村上 俊	(和歌山県)	【3位】	予選敗退 0-2(16-21, 18-21)	渡邊 航貴 仁平 澄也	(埼玉県)
駒田 直也 竹内 雅明	(東京都)	【3位】	予選敗退 1-2(16-21, 25-23, 20-22)	宇野 友規 西川 裕次郎	(東京都)

女子シングルス

選手名			総合大会の成績	対戦相手	
武田 陽子	(和歌山県)	【1位】	1回戦敗退 0-2(14-21, 9-21)	橋本 由衣	(東京都)
小口 晃佳	(和歌山県)	【2位】	1回戦敗退 0-2(15-21, 10-21)	仁平 菜月	(福島県)
森賀 佳奈	(愛媛県)	【3位】	予選敗退 1-2(11-21, 21-16, 13-21)	嶺井 優希	(京都府)
磯下 由貴子	(埼玉県)	【3位】	予選敗退 0-2(11-21, 14-21)	松田 蒼	(岐阜県)

女子ダブルス

選手名			総合大会の成績	対戦相手	
武田 陽子 小口 晃佳	(和歌山県)	【1位】	1回戦敗退 0-2(13-21, 15-21)	江藤 理恵 松田 蒼	(岐阜県)
野村 このみ 山本 しずか	(兵庫県)	【2位】	1回戦敗退 0-2(8-21, 12-21)	松尾 静香 内藤 真実	(東京都)
黒沢 奈菜 仲内 彩	(茨城県)	【3位】	予選敗退 0-2(4-21, 8-21)	篠田 未来 清水 望	(茨城県)
宮田 晶代 金山 友萌	(神奈川県)	【3位】	予選1回戦 2-0(21-16, 21-16)	高橋 侑希	(長野県)
			予選2回戦 0-2(11-21, 19-21)	米元 陽花 今井 優歩	(山口県)